

企画「卒業生へお祝いの言葉を贈ろう！」

令和2年度最後の図書館ワークスタディ(※)業務として、「卒業生へお祝いの言葉を贈ろう」というイベントを企画しました。

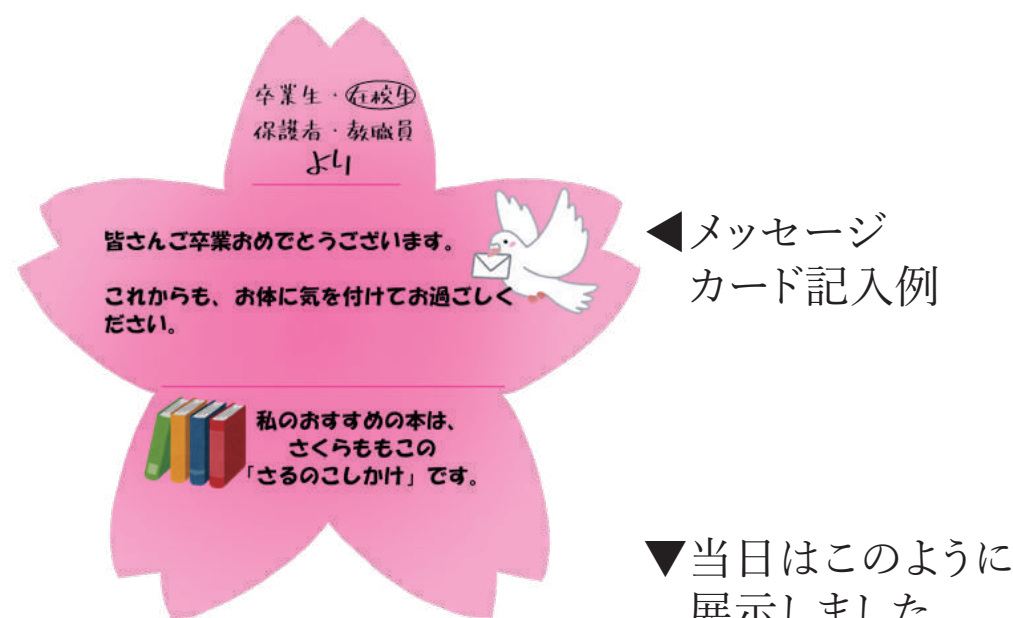
例年とは違い、縮小した規模で行われる卒業式となりますが、少しでも卒業生の思い出となるよう図書館としてお手伝いがしたいという思いから企画したものです。

今年度の卒業生・在校生・保護者・教職員に桜型メッセージカードを配布し、卒業生へのお祝いの言葉と、これからの世界が広がるきっかけとなれば良いとの思いから、おすすめの本(好きな本・思い出の本・影響を受けた本・今後読んでみたい本など)を匿名にて募集しました。結果54枚集まり、右のような展示を作成することができました。お忙しいところご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

こちらの展示は、当日卒業生のフォトスポットにもなっていたようで、沢山の方に喜んでいただけたので、時間のない中準備を進め、無事完成することができて良かったと思います。

図書館では、以降も様々な企画を開催していく予定ですので、その際には是非足を運んでみてください。

※ワークスタディ:学内アルバイト制度。現在は図書館とキャリアセンターで採用している。



【図書館からのご案内】

○参考図書や館内閲覧に指定されている本は貸出ができません。

○入館する際や貸出手続きの際に学生証・利用証が必要となります。忘れずにお持ちください。

○延滞している場合には、図書の貸出はできません。また、延滞した際には、すべてを返却し終えても、翌日まで貸出不可となります。

※詳しくは利用案内をご確認下さい。

【発行】

國學院大學北海道短期大学部図書館
滝川市文京町3丁目1番1号
TEL 0125-23-4111 / FAX 0125-23-5590
<http://www.kokugakuin-jc.ac.jp/>

○開館時間 月一金 9:00—18:30 土 9:30—16:00
○休館日 日・祝日、他に大学指定の休日

國學院大學北海道短期大学部は、高校生以上の地域の皆様に図書館を開放しています。利用ご希望の方は、運転免許証など、ご自身を証明できるものをお持ちのうえ、カウンターで利用登録をしてください。詳細は、図書館にお尋ね下さい。



國學院大學北海道短期大学部

図書館だより



令和3年3月31日

No.19

そうだ、本を読もう

図書・紀要委員会委員長
幼児・児童教育学科准教授 春田 淳一



この一年、本学はかつて経験したことのない対応を求められました。本学の図書館もコロナウイルス感染防止のため、長い間の閉館期間を経て、一定の制限を行った上での開館という不自由な状態を余儀なくされています。学生、教職員更には市民の皆さんにも、ご不便をおかけしていることにお詫びを申し上げますとともに、一日も早く日常が取り戻されることを願っております。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本をよもう。
(長田弘 / 「世界は一冊の本」)

本を読まなくなった。読書離れの時代になったと言われて久しくなります。もはや本の時代ではない。本よりもスマホが当然のようになりました。本そのもの、本の文化、本のありかたというものも、今はすっかり変わってきています。滝川の街の本屋さんも少なくなり、品揃えもすっかり変わってしまいました。本学の学生の読書状況、図書館の利用状況もまた、時代を表しているのかも

しれません。
一般的に読書とは、本を読むことだと考えられています。本を読んで何が書かれているのか、作者の言いたいことは何かをまとめることができ、初めて本を読んだと言えると思われがちです。しかし、時代は変わっても、読書とはただ本を読むことだけではなく、本に親しむという習慣のことであります。本を読まなくても困らないし、読んでわからなくてもかまわない。読書の原点となるのは、自分の日常の中にかく一冊の本がある。なければ置くということから、読書という経験が始まります。つまり、読書という経験が残すのは、わかるかわからないか、理解したか理解しなかったかではなくて、そこに本がある。本があったという日々の記憶であり、感覚なのです。

こんな時代だからこそ、学生だからこそ、本に親しむという習慣を大事にしてください。

「全て読書からはじまる。本を読むことが読書なのではありません。自分の心のなかに失いたくない言葉の蓄え場所を作り出すのが読書です。」
(長田弘 / 「読書からはじまる」)

令和2年度の図書館

令和2年度 蔵書数(令和3年3月31日現在)

合 計	和 書	洋 書	視聴覚
83,214冊	75,175冊	6,909冊	1,130点

和書754冊、洋書0冊、視聴覚資料1点を新たに受け入れ、令和3年3月31日までの蔵書数は上記のようになった。

和書の内訳は、固定資産図書43,232冊、教育研究図書31,943冊。洋書は、固定資産図書5,422冊、教育研究図書1,483冊。視聴覚資料は、固定資産183点、簿

外947点となった。
また、年度末に5年間所在が不明である紛失図書や複本、書庫狭隘化のため不要となった図書329冊を除籍した。

私たちの読むヨム

本を好きになって

国文学科2年 片桐 詩音

自分が本を好きになったきっかけは、小学生ころからではないかと考える。とても田舎の学校だったので、週1で来る移動図書館でたくさん本を借りては下校途中、歩いているときでも本を読んで帰るようなこともあった。休みの日になると、家族で図書館へ行ってどの本を借りようかととても悩み、図書館内をグルグル回って、両親には「この子は何時間でも図書館に居ることが出来てしまう。」と言われた。絵本や物語だけではなく、洋服屋さんに行ったときは、置いてある雑誌を何度も何度も読んで内容を覚えてしまうくらいだった。

そのようなきっかけから始まり、中学では、毎日のように学校の図書室に通うようになった。10分休みや昼休み、少しでも時間が空けば本を読んで、すっかり視力も落ちてしまうほどだった。そのころから、宮沢賢治をはじめとした、純文学に触れるようになり、日本語の美しさを実感し、難しい漢字が読めるようになりたいと漢字検定にも挑戦し始めた。その時、担任だった先生が司書の資格を持っている先生だったこともあり、図書館司書という仕事があることも知った。高校に入ってから、図書委員の仕事を通してたくさんの友人が出来たり、文芸作品を作っている友人からたくさん話を聞いたり、本が自分と人とを結ぶきっかけともなってくれた。

短大では、司書の授業や実際に図書館で働くこと

が、自分は社会でどのように働いていくか、自分はこれからどんな生き方をしていきたいかと考えるきっかけとなり、様々な経験を積むことが出来た。

また、私はそれまで純文学を多く読んでいたが、昨年「おうち時間」が増えたことで、今まであまり触れなかった作家の作品をたくさん読むこととなった。特に原田マハの「たゆたえども沈まず」と恩田陸の「蜜蜂と遠雷」に感動し、芸術家の歴史や音楽について勉強していきたいなと思った。また、多くの情報で溢れかえるような状況の中、読み取るという行動に対して、常に気を遣うようになった。

このように、どれだけ環境が変わっても、本は想像による楽しさを私にもたらすだけでなく、勉強への意欲、将来を考えるきっかけ、あらゆる方向から私に影響している。これからは社会人としての生き方を学ぶこと、生活を豊かにするということにも影響してくるだろう。活字の海をどこまでも泳ぎ、この先も本を携え、歩いていきたいと思う。



本学に所蔵していない本を読みたいときは、次の方法があります。詳しくは職員までお尋ねください。

①購入希望(リクエスト)を提出する

本学学生・教職員に限りリクエストを受け付けております。ただし、すべての本が入るわけではありませんので、ご了承ください。また、入るまでに時間がかかることがあります。

②他館から取り寄せる

道立図書館などから取り寄せて借りることができます。

③公共図書館・大学図書館に行く

学生証・身分証明書・紹介状などが必要となる場合があります。



日本語は難しい言語であるのか

総合教養学科2年 東本 優月

私は図書館だよりを書くにあたって『日本語びいき』（清水由美著、中公文庫）を読んだ。本書の内容は日本語教師である清水由美さんが「母語を外から見る目」を持ち日本語の発音や文法についてどう考えるかを述べているものである。

いきなりだが皆さんは日本語は外国人にとって難しいという話を聞いたことがあるだろうか。私は中学生の時に通っていた塾の先生から日本語はひらがな、カタカナ、漢字の三種類の文字があり、文法も世界の公用語になっている英語と異なっている点から日本語は難しいものであると聞いていた。確かに私自身もいまだに読めない漢字があるし敬語も正しいかが不安になることがある。しかし清水さんは日本語だけが特別難しいことはないと述べている。なぜそう言えるか。それは学習者の母語によって日本語の感じ方が違うからである。日本人なら英語を学校で学んでいる際に発音で躓くことがあるだろう。それは、日本語は英語よりも発音の種類が少ないからである。言い換えれば、他

の言語を話す人からすると日本語の発音を覚えることは決して難しいことではないのではないか。文法に関しても韓国語などは構造が似ている。さらに日本語には漢字があるがひらがなさえ覚えていればふりがなを見て読むことができる。このように見ていくと確かに日本語が世界で特別難しい言語ではないことが理解できる。単純に難しいと決めつけるのではなく客観的に見るのが大切だと改めて考えることができる本だった。

私は日本語を話すものとして違う立場から見たときどのように感じるかをこれからも考えていきたいと思う。少しでも日本語に興味があるなら是非手に取って読んでみてほしい。

本で得たもの

幼児・児童教育学科1年 佐藤 陽菜

私が本を読み始めたのは高校一年生からでした。私はバレーボールをやっていたので、年間に読めるのは三冊くらいで少ないですが、高校の朝読書という時間で小説を読み始めてから、小説の難しさと面白さを知り、周りの友達が漫画を読んでいる時、私は小説を読んでいました。

そのなかでも川村元気『四月になれば彼女は』、はらだみずき『サッカーボーイズ～明日への絆～』など、命にかかわり、その環境下の中でも前向きに生きていくという物語が好きでよく読んでいました。命の尊さ、強さなど、私の命についての考え方はこの二冊で変わった気がします。

高校を卒業し、本学幼児保育コースに入学してからは読むジャンルが一変し、今までは300ページ程の小説を読んでいましたが、現在は、子ども向けの15ページほどの絵本や、創作技術が載っている本をよく読

むようになりました。保育実習前は、学校で学んだ知識と技術以外でも何かできることはないかと考え、子ども達に喜んでもらえるような絵本を探したり、部分実習で行う活動の参考書を探しに、よく図書館を利用しました。特に活動や製作活動の参考書はわかりやすく内容が記載されており、写真で説明してくれているのも多々あったので、とても活用しやすかったです。また、仕掛け絵本や英語の絵本など、子供たちが喜びそうな絵本も沢山あるので、特に実習前は図書館に行って、自分の知識と技術をレベルアップしたら良いと思います。

本は、知識や情報を与えてくれるだけでなく、豊かな気持ちにさせてくれたり、様々なことを教えてくれます。私も本を読むことが好きなので、これからも色々なジャンルの本を今後も読んでいきたいと思っています。